「命言」の背景

Message 01

仙台空港からほど近い宮城県岩沼市立玉浦小学校。海岸から2km余りのところにあるこの学校にも津波が押し寄せた。
掲載した言葉は、当時幼稚園児だった児童が地震発生時のことを書いた作文の一節である。
岩沼市立玉浦小学校の児童は、2012年8月徳島市や勝浦町を訪れ、交流行事を通じて本県との絆を深めている。
写真は、津波によって校庭に流されてきた自動車や瓦礫。

Message 02

宮城県女川町を襲った津波は海抜35.0m地点まで駆け上がり、一瞬のうちにさんま漁で栄えた港町を飲み込んだ。女川町立女川第二小学校は高台にあったため、津波による被害は免れたものの、厳しい寒さと暗闇の中被災初日の夜を迎えることとなった。
西村教諭は、恐怖に震えながら「お母さん、お母さん」と呟くことで自分自身を勇気づけている児童の姿が、今でも鮮明に思い出されるという。

Message 03

壊滅的な被害を受けた宮城県名取市閖上(ゆりあげ)地区。行方不明者の捜索活動に従事した本県の警察官は、想像を絶する悲惨な光景に言葉を失った。
一方で、自衛隊、米軍、各国からの救援隊等と行動をともにするうち、「命の前には国境や組織などは関係ない」と強く感じたという。
写真は、南アフリカ共和国の救援隊との共同捜索活動の様子。

Message 04

宮城県石巻市立大川小学校(Message05参照)から10ｋｍほど東にある宮城県立石巻北高校飯野川校。
身元特定の業務にあたった本県の警察官は、貴重品を詰め込んだリュックを背負ったお年寄りや、通学用のヘルメットをかぶった小学生など、運び込まれるご遺体の様子から「生きたかった」という強い思いを感じたという。
写真は、遺体安置所となった高校の体育館。

Message 05

徳島県阿南市那賀川町に駐屯する陸上自衛隊第14施設隊は、全校児童108人の7割に当たる74人が死亡、行方不明となった大川小学校の捜索活動に従事した。重機を使って学校を覆い尽くした土砂を撤去する作業にあたった隊員は、身を削るような思いだったという。
写真は、大川小学校で捜索活動を行う自衛隊。

Message 06

岩手県大船渡市は、今回の大津波により、死者340人、行方不明者84人を数える大きな被害を受けた。
山手にある大船渡市立第一中学校は、津波による直接的な被害からは免れたものの、4割の職員、2割の生徒は自宅が全半壊するなどの被災者であった。
震災1週間後、生徒たちは「希望」という手書きの学校新聞を作成し、避難所に配布しはじめた。そこには「トイレ掃除、おつかい、何でもします。一中生に声をかけて仕事をさせて下さい」と書かれていた。被災者でありながら支援者としての振る舞いを行ったのである。
学校新聞「希望」は避難所の人たちの心の支えとなり、現在も月に1〜2回のペースで発行され続けている。

Message 07

岩手県釜石市内の北部にある鵜住居(うのすまい)地区は、津波による死者・行方不明者が583人を数えた。
こうした状況にもかかわらず、同地区にある釜石東中学校と鵜住居小学校では、震災当日登校していた児童生徒約600人全員が無事に避難し、「釜石の奇跡」として広く知られることとなった。
地震発生から20日後の3月31日、延期されていた釜石東中学校の卒業式が行われた。掲載したのは「卒業生代表のことば」の一節である。
写真は、2012年夏に撮影された鵜住居地区の風景。卒業生代表の家もこの辺りにあったという。

Message 08,09

徳島県教育委員会では、女川第二小学校を中心に支援活動を行い、学校再開後は、徳島商業高等学校がこれを引き継ぎ交流を続けている。
掲載した同校児童の2つの言葉には、震災を乗り越え前に進もうとする強い意志が表現されている。

Message 10

宮城県岩沼市で被災し、3人の子どもとともに実家のある徳島市に避難している古積優子さん。「被災地を元気づけよう」と被災地に千羽鶴を贈る活動を続けている。
この活動は徳島市内にある27の公立幼稚園に広がり、園児や保護者らが作った折り鶴は、2012年8月までに計18回、計約3万2千羽にのぼり、岩手、宮城、福島の各県学校等に届けられた。
被災地を元気づけるための活動は、徳島の子どもや親たちが人と人の絆の素晴らしさ学ぶことにもつながった。
写真は、徳島市立内町幼稚園での集合写真。

Message 11,12

徳島商業高等学校では、2011年5月から女川第二小学校に対する「異校種間ペアリング支援」に取り組んでいる。

これまでに女川第二小学校を3回訪問して交流会を開催するとともに、2012年8月には、同校の児童を徳島に招待した。

交流の最大の目的は、一緒に遊び、ご飯を食べ、話すことによって、厳しい生活を続けている子どもたちの心を解放すること。徳島商業高等学校の生徒たちは、活動を通じて他人の事を気づかうことができるようになったと感じている。

Message11の写真は、2012年8月に徳島県でサマーキャンプを行ったときに撮影されたもの。

Message12の写真は、インターネット回線を使ったテレビ会議の風景。

Message 13

徳島科学技術高等学校では、木製の遊具を製作し、宮城県東松島市や女川町の保育所に贈る活動を続けている。

小さな子どもたちが震災後十分に遊ぶことができていないと聞き、同校の生徒たちが笑顔で遊ぶ子どもたちの姿を想像しながら丁寧に仕上げた。この活動に参加した生徒は、被災地から新たなものづくりに挑戦する力をもらったという。

写真は、2012年12月、東松島市矢本東保育所に遊具を贈呈した際の様子。

Message 14,15

福島県立小高商業高等学校のある南相馬市小高地区は、2011年4月から約1年間、福島第一原発から20km以内に設定された「警戒区域」となった。

2011年度は、福島市と相馬市の高校に分れての間借り生活、現在は、南相馬市の北部にある福島県立原町高等学校内の仮設校舎で授業を続けている。

こうした状況にもかかわらず、商品開発等の商業教育に積極的に取組み、2012年11月本県で開催された「第20回全国高校生徒研究大会」に東北ブロック代表として出場を果たした。

Message14は、同校が開発した「だいこんかりんとう」の看板を掲げる商業研究部の女子生徒（“小高っ娘”）。

Message15は、不自由な学校生活の中で勉強を続ける生徒。パソコンなどの備品は「警戒区域」が解除になるまで、学校に取りに行くことができなかった。

Message 16

福島県富岡町は、福島第一原発事故の影響によって全町避難となり、福島県郡山市に臨時の町役場が設けられている。

郡山市内の応急仮設住宅にある、富岡町生活復興支援おだがいさまセンターの青木淑子さんは、仮設住宅内のミニFM局のパーソナリティや、震災をテーマとした音楽朗読劇等を通じて、故郷を離れて生活を続ける町民を励ますとともに、福島の現状を伝える活動に取り組んでいる。

写真は、おだがいさまセンターでの青木淑子さん（左）と、佐藤茂紀教諭（Message17参照）。

Message 17

郡山市中心部は、福島第一原発から直線距離で約60km離れているにもかかわず、未だに放射線量が高い「ホットスポット」が至るところにある。いわゆる「原発疎開」による転出が相次ぎ、市内の学校の児童生徒数が大幅に減少した。

2012年3月まで郡山市内にある福島県立あさか開成高等学校に勤務していた佐藤茂紀教諭は、原発事故によって高校生が抱えているストレスを演劇を通じて発散させようと考えた。

あさか開成高等学校演劇部では、原発事故後の福島を描いた構成劇「この青空は、ほんとの空ってことでいいですか？」の公演を、県内だけではなく、東京や横浜でも行っている。

佐藤教諭は、2012年春の定期人事異動で県南部にある福島県立光南高等学校に異動。新たな学校で演劇指導を続けている。

写真は、あさか開成高等学校演劇部の練習風景。

Message 18

福島県南相馬市は、市域の一部が「帰宅困難地域」や「居住困難地域」に指定されるなど、今なお原発事故による深刻な影響を受け続けている。

南相馬市立総合病院の原澤慶太郎医師は、15歳のときにテレビに映るボスニア紛争を見て外傷外科医を志し、心臓血管外科医の職についたが、2011年11月、地域医療に身を置きたいとの思いから南相馬市に志願して転勤した。

放射能汚染を懸念して子どもを連れて市外に移住する母親、一方でその母親は高齢者を支える存在でもあるため、家庭の介護力が低下し、地域医療は危機に瀕しているという。

また、福島の子どもたちは放射能による身体への影響以上に、風評被害や差別に苦しめられている。

写真は、原澤医師（左端）と南相馬の子どもたち。

Message 19

大船渡市教育委員会教育センターに巡回型スクールカウンセラーとして勤務する諏訪賀一さんは、被災地の人々に寄り添いたいと決意し、前任地の沖縄県から岩手県に赴任した。

時間が経過しても、子どもたちの心の傷は消えない。震災直後は、家族を亡くした子どもたちに強く影響が現われたが、時間の経過とともに家族以外の身近な人の死に起因するうつ、自責に苦しむ子どもが増えている。諏訪さんは、「震災を乗り越えた命を大切にしたい」と地道にカウンセリングを続けている。